

敬意を強める接尾語「す」「さす」について

—— 古典文法敬語法指導改善の一提言 ——

武 山 隆 昭

一、問題の所在

昨年、某社出版の高等学校用「古典（古文）」教科書の『枕草子』部分について指導資料を書かせていただいた。

第二〇二段に^(注)

中納言まゐり給ひて、御扇たてまつらせ給ふに、「隆家こそいみじき骨は得て侍れ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。……以下略……（傍線稿者、以下同じ）というくだりがある。例の「海月の骨」の話である。ここの「たてまつらせ」「参らせ」の「せ」を文法上どう説明したらよいかについて考察した結果の報告と一つの提案をしたいというのが本稿の趣旨である。

右の「たてまつらせ給ふ」について、

○三谷栄一・伴久美『文法中心全解枕草子』（有精堂）では、「動・ラ・四・未十尊・用十準助動・尊・体」と分け、

「せ」を尊敬の助動詞「す」の連用形とみている。

○阿部秋生・野村精一『古典評釈シリーズ枕草子』（右文書院）では、「普通は、隆家が中宮に扇をさし上げた時、と解し、『せ』を尊敬とし『せたまふ』で隆家への筆者からの尊敬とするのが通説。しかし『枕草子』中で隆家の描写はすべて『たまふ』で統一されており、このみ二重尊敬を認めるのは疑問が残る。むしろここは『せ』を使役と考えて、お側の女房を通じて奉ると解する方が穩当であろう。」として、使役説を唱えている。

○榊原邦彦『古典新釈シリーズ枕草子』（中道館）は、『たてまつらせ』は、謙讓の動詞「たてまつる」の未然形に、謙讓の助動詞「す」がついた「たてまつらす」の連用形。……中略……三二三段『大納言まゐり給ひて』の段の『申させ給へば』の『申させ』も、謙讓の助動詞がついて一語化したもの。」として、謙讓の助動詞「す」の存在を認める立場である。

の三説が並存している。他の諸注釈書は右のどれかと同じか、または全く説明していない。稿者は、右の三説に対して、この「せ」を敬意を強める接尾語「す」と規定すれば最も合理的に説明できると考えるのである。以下にその理由を述べる。

なお、「参らせ」は、諸注釈書ともに「動・サ・下二・未」（全解）のように一語とみている。

二、「たてまつらす」という語の存在

まず前掲の三谷・伴氏説は、『枕草子』において地の文では「せ給ふ・させ給ふ」の二重敬語は天皇・中宮・道隆といった極めて高位の人に限って用いられていることから、阿部・野村氏ご指摘のごとく従えない。

次に使役説は、確かに実際の行動では女房を介して渡すのであろうが、それを一々使役の助動詞で表現するのかという疑問が残る。使いに持たせて、とか、担当者に命じて、と言った介在者を特に意識する場合には、使役の助動詞が用いられることが多いが、ここは弟が姉に御簾ごしに言葉を交わしながら献上する場面である。『落窪物語』(巻四)の巻頭で、女君の父中納言が大納言の職を望んだので男君(道頼)が父右大臣に自分の大納言を舅に譲ろうと思うがと相談したところ、右大臣が息子に「早うさるべき様に奏を奉らせよ。大納言はなくてもあやしくもあらじ」と言う。続いて地の文で「奏奉らせ給ひて、中納言、大納言に成り給ふ宣旨くだし給ひつ。」とある。これらの「奏奉らす」は、左大将兼大納言が帝に上奏文を差し上げる場面であるから、藏人等に取り継ぎをさせて、といった使役ではなく、奏上文の受け手である帝に対して強い敬意を表す「奉らす」という謙讓動詞とみるべきであると考ええる。『枕草子』のこの場面も、中宮に対して強い敬意を表す「たてまつらす」という一語の謙讓動詞の連用形と解する方が穏当であると思う。

『枕草子』からもう少し例を挙げる。一八三段に、

御形の宣旨の、上に、五寸ばかりなる殿上童のいとをかしげなるを作りて、みづら結び、装束などうるはしくして、なかに名かきて、たてまつらせ給ひけるを、「ともあきらの大君」とかいたりけるを、いみじうこそ興ぜさせ給ひけれ。

とある。この「たてまつらせ」は、御形の宣旨という女房が主上に殿上童の人形を差し上げた場面である。筆者清少納言の主上(村上天皇とも花山天皇とも)への強い敬意を表す「たてまつらす」の連用形で、「給ひ」は先輩女房に対する敬意を表す尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形と説明できる。

もう一つ。二七八段に、

（使が持参した主上より中宮あての）御文は、大納言殿とりて殿にたてまつらせ給へば、ひき解きて、「ゆかしき御文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らん」とはのたまはすれど、「あやふしとおぼいためり。かたじけなくもあり」とてたてまつらせ給ふを、……

とある。積善寺供養を間近かにひかえて中宮定子が二條の宮に退出した二月のある日のことである。一条帝から届いた中宮あての手紙を、使いから受け取った大納言伊周が、父関白道隆に直接手渡す場面が傍線（一）の「たてまつらせ」である。「せ」は使役とは考えられないので、筆者の関白に対する強い敬意を表す讓讓の動詞「たてまつらす」の連用形と解せられる。傍線（二）の「たてまつらせ」も関白が女房を介さず直接娘の中宮に手紙を渡す場面であるから、筆者の中宮に対する強い敬意を表す讓讓の動詞「たてまつらす」の連用形ということになる。

この「たてまつらす」の「す」は、本来使役の助動詞である。使役は中に人を介するために間接的な言い方となる。その間接さが遠まわしな言い方となり、受け手（対格とも）に対して敬意を表す効果を持つ。すなわち、『福武古語辞典』の「たてまつらす」の項に、

〔奉らす〕（他サ下二）（「たてまつる」の未然形＋使役の助動詞「す」）献上する。差し上げる。「白き木々に立て文を付て『これ——せむ』と言ひければ」〈枕・一三八〉▽助動詞「す」が、使役の意味から転じて、讓讓の意味を強めるのに用いられたもの。「奉る」よりも客体への敬意が強い。

とあるごとくである。前掲の榊原氏説も同様の考え方に立っており、尊敬の助動詞「す」が讓讓語に付く場合には、上の讓讓の意を強める働きをするとの意で、讓讓の助動詞「す」と説明されたものと解する。「申さす」の「す」、「聞こえさす」の「さす」、「まゐらす」の「す」も同様に説明できよう。これは有力な考えで、稿者も昨年の指導資料ではこの立場を少し修正して「上に来る敬語動詞の敬意を強める助動詞」と説明したのであった。すなわち、「たまはす」

「のたまはす」のように上に尊敬の動詞がある場合には、その尊敬の意を強め、上に謙譲の動詞がある場合にはその謙譲の意を強める働きをする。これを一つにまとめて「敬意を強める助動詞」と規定したわけである。

ところが、助動詞とするのは誤解を受けやすいと考え直し、本稿で「接尾語」と訂正する。上代の助動詞「ゆ」が付いて一語化した「思ほゆ（覚ゆ）」「見ゆ」の場合語構成要素として助動詞「ゆ」の存在を説かないように、助動詞「す・さす」を認めるのは一般的なスクール文法の品詞の定義に鑑み避けたいと思う。さすれば接尾語とするのが最も妥当ということになる。次に若干の根拠を示す。

宮地裕氏は、「助動詞とは何か」^(注)という論文において、助動詞の相互承接の点で「す・さす・しむ」が一番上にくることを指摘したあと、「活用の活発なもの（引用者注Ⅱ命令形まで揃っている）ほど動詞の接尾要素的性質がつよくて、承接上も上位に位置し、活用の活発でないものほど話し手の判断情意にかかわる性質がつよくて、承接上、下位に位置する傾向がある」と述べておられる。すなわち、「す」「さす」は接尾語的要素のつよい助動詞であるということだから、「たてまつらす」「まゐらす」「きこえさす」「申さす」を一語として扱い、「す」「さす」は接尾語としての立場で語構成の要素となっていると説明する妥当性が生ずる。

さて、この「奉らす」の、管見に入った最も古い例は、『竹取物語』でかくや姫が人まに月を見ては泣いているのを見て、近く使はるる人々が竹取の翁に告げる言葉の中に出てくる次の用例である。「かくや姫の……いみじくなげく事あるべし。よく／＼見たてまつらせ給へ」とある「たてまつらせ」は、話し手のかくや姫に対する敬意を表す謙譲語である。翁が誰かに命じて姫を監視させることは考えられない場面だから、「せ」は使役ではなく、謙譲の意を強める働きをしている接尾語である。〔さへや給／＼〕という意識から見て、二重尊敬でもない。

三、「参らす」「聞えさす」「申さす」

「奉らす」と同様の構成と考えられる三語を取り上げる。

(一)「参らす」

○ 節は五月にしく月はなし。……中宮などには、縫殿より御薬玉とて、色々の糸を組み下げて参らせたれば、御帳たてたる母屋のはしらに、左右につけたり。〔枕草子〕三九段

この場面は、五月の節供の縁起物である薬玉を、縫殿から中宮様の所に献上するところである。「まゐらせ」の「せ」は、使者に命じて献上させる意の使役と説明できないこともないが、使者を意識する必要のない場面であるから、「まゐらせ」は筆者の中宮に対する強い敬意を表す謙讓動詞「まゐらす」の連用形と考え、「せ」を上「参る」に付いて敬意（ここでは謙讓）を強める働きをする接尾語「す」と解したい。

○ ねたきもの。……南の院におはします頃、「とみの御物なり。誰も誰も、あまたして、時かはさず縫ひてまゐらせよ」とて賜はせたるに、南面にあつまりて、御衣の片身づつ、誰かとか縫ふと、ちかくもむかはず、縫ふさまも、いと物ぐるほし。〔枕草子〕九五段

この「まゐらせよ」は、上臈の女房Aが清少納言たちに中宮の命令を伝えた言葉である。中宮の自敬表現ともとれるが、稿者は話者（上臈女房A）の中宮に対する強い敬意を表す謙讓動詞「まゐらす」の命令形、と解する。

進藤義治氏は「参らせ」について次のように述べておられる。^(注6)

……さまざまの果物を皆もののかたに盛りなどして参らせたるなりけり。〔栄花物語〕へもとのしづく 全注釈

④二〇九六

右の「せ」は、「参らせ」の一部となり、全体で対格（二格）に対する尊敬（謙譲）の動詞となっている。従ってその結合段階に於て、せは主格尊敬用法ではなく使役用法であり、使役のせが「まるる」の下に結合して、「まるる」に使役の意味を添加して遠まわしな表現が生じ、それが対格に対する尊敬表現となったものである。

従うべきである。

(二)「聞えさす」

『福武古語辞典』には、「きこえさす」の項の【参考】に、「助動詞『さす』が使役の意から転じて、謙譲の意を強めるのに用いられたもの。『聞こゆ』よりも客体への敬意が強い。」と説明してある。

進藤義治氏は、『栄花物語』の語法について、

「聞え慰む」と「聞えさせ慰む」、「聞えわぶ」と「聞えさせわぶ」という、敬意ニュアンスを異にする、各準複合語的語句が存在し、「聞えさせ慰む」「聞えさせわぶ」の「聞え」に下接する「さす」は、俗に二重敬語といわれる「させ給」という形をとる為手尊敬表現の要素とは、これらの場合別な受け手尊敬の要素であることが確かめられる。と述べておられる。用例にあたってみよう。

○ 無名といふ琵琶の御琴を、上の持てわたらせ給へる、……中略……「これが名よ、いかに」とかきこえさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおほえしか。（『枕草子』九三段）
この場面は、ある女房が「この琵琶の名ですよ、何といいましたかしら」と中宮様に申し上げると、「ほんのごくつまらないもので、名さえないの」とおっしゃった。この中宮様のさりげない洒落に対して、筆者が「めでたし」と

賞賛しているところである。「きこえさする」は、ある女房が取り次ぎを介することなく直接中宮に申し上げた場面（地の文）であるから、筆者の中宮に対する強い敬意を表す謙讓の動詞「きこえさす」の連体形である。

○（殿は中宮の）御前（^{おまへ}）にゐさせ給ひて、ものなど聞え（^{きこ}）させ給ふ。御いらへなどのあらまほしさを、里（^{さと}）なる人などにはつかに見せばやと見たてまつる。（『枕草子』二七八段）

この場面は、二條の宮に退出した中宮の前に、父関白道隆が座って会話を交わすのを筆者がそばで見ているところである。「聞えさせ」は、筆者の中宮に対する強い敬意を表す謙讓の動詞「聞えさす」の連用形である。語構成は、「聞ゆ」の未然形に敬意を強める接尾語「さす」がついて一語の動詞となったものである。

○（桂の皇女に仕えるうなゐが、式部卿宮に螢を捕えるように命じられて）汗衫（^{かぎみ}）の袖（^{そで}）に螢をとらへて、つつみて御覽（^み）ぜさすときこえさせける、

つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれるおもひなりけり（『大和物語』第四十段）

この場面は、少女が直接式部卿宮に螢を手渡す時に、自分の思いを歌に詠んで申し上げたところであるから、「きこえさせ」の「させ」は、使役ではなくて敬意（謙讓）を強める接尾語であり、「きこえさす」を一語の動詞として扱うのがよい。

しかし、次の用例はどうであろうか。

○里に出（^い）でてしばしあるほどに、「とくまありね」など、仰せ（^{おほ}）ごとの端に、「……」など仰せられたる、御返りに、かしこまりのよし申して、私には、「いかでかはめでたしと思ひ侍らざらん。…思ひ給へし」ときこえ（^{きこ}）させたれば、たちかへり……（『枕草子』八六段）

この場面は、筆者が実家へ下っていた時に中宮様から早く帰参するようにとの仰せ言をいただいたところである。私

的なご返事として「いかで……思ひ給へし」と、お使いに來た女房に言上を取り次いでもらったの意であるから、この「させ」は使役の助動詞「さす」の連用形である。したがって、「聞えさす」を常に一語と考えてはいけない。

(三)「申さす」

○ (大納言道頼は) 父おとどの御もとにまうでたまひて「(中納言が) かなむ思ひたまへるを、……しはべらむと思ひはべる。御けしき、よろしう定めさせたまへ」と申させたまふ。(『落窪物語』卷四)

この場面は、男君道頼が女君の父中納言の希望を叶えるため自分の大納言職を譲ろうと思いたち、父右大臣に裁可を仰ぐところである。もし、「せ・給ふ」の二重尊敬と考えると、大納言道頼に地の文で最高敬語を用いたことになり不可である。「申させ」を父右大臣に対する「(申す)より」強い敬意を表す謙讓動詞「申さす」の連用形と考え、「たまふ」を道頼大納言に対する敬意を表す尊敬の補助動詞「たまふ」の終止形とすれば、作者の敬意が父右大臣の方により強く表現されておりまことに合理的ということになる。

○ (花山天皇が)「^{ケンシヨウ}頭證にこそありけれ。いかがすべからん」とおほせられけるを、「さりとて、とまらせたまふべきやう侍らず。神璽・宝劔わたり給ぬるには」と、あはたどののさはがし申給けるは、……中略……かへりいらせ給はんことはあるまじくおぼして、しか申させたまひけるとぞ。(『大鏡』卷一、花山院^{花山})

この場面は、有名な「花山院の出家」で高校の教科書にもよく採られている箇所である。文脈は、粟田殿道兼が花山院に「しか申させたまひける」となっている。この「せ」を尊敬ととると粟田殿に二重尊敬の表現をしたことになりまずい。かと言って使役ととることもできない。どう生徒に説明したらよいかと、高校の先生から質問されたことも複数回ある。この答は一つ、「せ」は上の「申す」の敬意(ここでは謙讓)を強める働きをする接尾語で、「申さす」を一語の謙讓動詞とみる。「申さす」は「申す」よりも敬意が強いので、花山院に対して道兼(たまふ)より強い敬

意表現を用いている、と説明するのである。世継の会話文ではあるが、地の文の意識で書いてある。

○ 上の御前の、柱に寄りかからせ給ひて、すこし眼らせ給ふを、「かれ、見たてまつらせ給へ。いまは明けぬるに、かうおほのごもるべきかは」と申させ給へば、「げに」など、宮の御前にもわらひきこえさせ給ふも、知らせ給はぬほどに、〔枕草子〕三二三段

この場面は、清涼殿の弘徽殿の上御局に中宮様が上られ、主上もいらっしゃる。そこへ大納言伊周も参上して夜明け方まで楽しい会話をしているところである。正暦五年当時十五歳の一条天皇はさすがに眠くなって中柱に寄り懸つてとろとろと眠ってしまった。それを見た二十一歳の伊周が十八歳の中宮に「かれ、見たてまつらせ給へ」と、「申させ・給ふ」のである。「申させ」は筆者の中宮に対する強い敬意を表す謙讓の動詞「申さす」の連用形で、「給ふ」が筆者の伊周に対する尊敬を表す補助動詞ということになる。これによって、〔丑四ノ申〕という身分関係も明白となる。

なお、点線をほどこした「たてまつらせ」「きこえさせ」を、一語と見ずに、「さ」「させ」を尊敬の助動詞と見て、下の「給ふ」とともに最高敬語（二重尊敬）と解するのが通説であるが、主上に対する強い敬意を表す謙讓の補助動詞「たてまつらす」、「きこえさす」と解する方がよい。〔中下ノ申〕という身分関係が明白となる。

この「申さす」を一語とみる考え方を積極的に主張する説は今のところ管見に及ばない。ただ一つ、消極的な説として、〔日本国語大辞典〕がある。ポイントだけを抜き出す。

□ 『連語』（動詞「申す」に使役の助動詞「す」の付いたもの）申し上げさせる。

□ 『他サ下二』○が一語化して、「申す」よりも、申し上げる対象をより強く敬うようになったもの。↓補注。

○は、当時、身分の低い者が高い者へ言上する時は、直接にはなく取次ぎを通すのが普通だったので、「申しあ

げさせる」というこの表現が「申す」よりもより強くその対象を敬うことになったと説明される。そして、「源氏—夕顔」の「さるべき人召すべきにやなど申さすれど」……などもこの例とするが、これらはいずれも「取り次ぎをして」の意を補って解すべきものとみられる。……㊦の確例とできそうなものはほとんどみられない。しかし、前掲の三例などは確例と言えるであろうから、今後「申さす」については辞典類の記述に再検討の余地があるろう。

四、『枕草子』における敬意の対象

前章までで取り上げた「奉らす」「参らす」「聞えさす」「申さす」の四語について、それぞれ「奉る」「参る」「聞ゆ」「申す」よりも強い敬意を表すと述べた。その実態を証明するべく、『枕草子』（三巻本）の全部の用例にあたつて、敬意の対象（誰に敬意を表しているか）を調査してみた。別掲の表Ⅰがその結果である。

この表から判明したことは、「奉らす」「参らす」「聞えさす」「申さす」の方は、天皇、中宮、女御、女院詮子、斎院と言つた高貴・高位者に限られ（例外として験ある僧・一条帝の乳母）ているのに対して、「奉る」「参る」「聞ゆ」「申す」の方は高貴・高位者から宣方・生昌などの中位者まで広く用いられていることである。これによつて、語構成の上から「奉る」よりも「奉らす」の方が強い敬意を表すと規定したことが、実際の用例によつて確認できた。

なお、表作成にあつては、「す」が明らかに使役の用法であるもの、「せ・させ+給ふ」の形のもは当然のことながら除いてある。尊敬語として用いられた「奉る」（二〇例）も除いた（「参る」の尊敬用法はナシ）。集計では、いわゆる本動詞と補助動詞とを別々に扱つたが、煩瑣を避けて表ではまとめて示した。

表Ⅰ 『枕草子』における敬意の対象別用例数

対 象	奉る	奉らす	参る	参らす	聞ゆ	聞えさす	申す	申さす
一条天皇	3		18	2	2	1	9	2
昔の天皇（含、村上、円融）	4	1	3			1	3	
天皇および上達部たち、または親王たち	3							
天皇および中宮定子			1	2				
中宮（皇后）定子	14	2	102	24	5	7	25	2
東宮			3		2			
淑景舎原子	1		7	1	2		1	
御匣殿、三の君			1		1			
道隆	5	1	2		2		4	
伊周	2				6		4	
隆家	1				1			
隆円	1							
貴子							1	
女院詮子	4		5	2				
斎院選子			2			1		

后候補の姫君 (含、実家)								
一品宮など上流の人物	3				2			
式部の丞など中流の人物			1			4		2
その他	2		2				1	

五、辞典と文法テキストの扱い

「す・さす」を、敬意を強める接尾語と規定し、上に尊敬語がある場合には尊敬の意を強める働きをし、上に謙讓語がある場合には謙讓の意を強める働きをすると説明してきた。この考え方に立つと、上に尊敬語のくる「たまはす」「のたまはす」「御覽ぜさす」、上に謙讓語のくる「たてまつらす」「まゐらす」「きこえさす」「申さす」をそれぞれ一語の動詞として認めることになる。

しかし、前章までで主として謙讓語について見てきたところ、「まゐらす」「聞こえさす」は一語として認めるが、「奉らす」「申さす」は一語として認めないといった傾向があるようなので、次に現行の辞典類がどのように扱っているかを比べてみることにした。

手近な十点の辞典を対象として、右の七語を「見出し語」として挙げているかを調べ一覧表としてみた。なお、上代の四段活用型の尊敬の助動詞「す」のついた「おもほす」も一語意識の参考として調査した。

それぞれの語を見出し語として掲げていれば○印、挙げてなければ×印。連語とことわってあれば㊦印とした。ま

た、○の下に「す・さす」の説明を略号で記した。すなわち、尊敬は尊、敬意を強めるは敬、使役は使、謙譲は謙（本来使役であつたものが転じて謙譲の意を強めるのに用いられたものトスルモノも含む）。何も書いてない欄は、辞典に説明が記していないことを示す。なお、角川古語大辞典は「おもほす」○、「御覽ぜさす」×、「きこえさす」×である。他は未刊。

表Ⅱ 辞典の扱い

語 辞典	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
たまはす	○	○尊	○	○尊	×	○尊	○	○	○尊	○尊
のたまはす	○	○敬	×	×	○尊	○尊	×	○	○尊	○尊
おもほす	○	○尊	○	○	○	○尊	○	○	○尊	○尊
御覽ぜさす	○	×	×	×	×	×	連	連	連使	×
たてまつらす	×	×	×	×	×	×	×	×	謙	×
まゐらす	○	○使	○	○	○	○使	○	○使	○謙	○使
きこえさす	○	○使	○使	○	○使	○使	連使	○	○謙	○謙
申さす	○	連使	×	×	×	×	×	×	連使	×

1 日本国語大辞典。2 古語大辞典（小学館）。3 広辞苑。4 新潮国語辞典。5 岩波古語辞典。6 旺文社古語辞典。7 新明解古語辞典。8 例解古語辞典。9 福武古語辞典。10 大辞林。

この表Ⅱから窺えることは、「おもほす」「まゐらす」「きこえさす」が調査した十種類のすべてに見出し語として採られており、一語として認知されているのに対して、「御覽ぜさす」「たてまつらす」「申さす」は、一ないし二種の辞書に採用されているのみか連語扱いで、一語意識が薄いと言えらる。このような違いはなぜ生じるのか。一つには用例の多少によると思われる。二つには辞書編者の感覚に左右される面もあるう。しかし、語構成から帰納して同じ成り立ちのものは同じ扱いにするべきではなからうか。その点で、最も新しい『福武古語辞典』（昭和六三年初版）が八語をすべて見出し語として採っている点を評価したい。

次に、高等学校用の副教材として用いられている文法テキスト^{注9}を見てみよう。次の十本を対象とした。（一）内は略符号。

- 塚原鉄雄監修『新版高校生の古語文法』（京都書房）——（京）。秋本守英他『新・古典の文法』（中央図書）——（中）。日栄社編集所『新・要説文語文法』（日栄社）——（日）。日栄社編集所『新・簡明文語文法』（日栄社）——（栄）。石井庄司監修『解釈のための新編古典文法』（とうほう）——（と）。中田祝夫他『新選古典文法』（尚学図書）（尚）。江口正弘『新明解古典文法』（尚文出版）——（文）。小林國雄『精選古典文法』（東京書籍）——（東）。中村幸弘『生徒のための古典読解文法』（右文書院）——（右）。清水文雄他『対訳古典文法』（第一学習社）——（第）。

右の十本の中から敬語動詞一覧に次の八動詞を挙げている書名を略符号で記す。

- | | | | |
|-------|--------------|--------|----------------|
| たまはす | 京日栄尚東右（6） | たてまつらす | 右（1） |
| のたまはす | 京日栄と尚東右第（8） | まゐらす | 京中日栄と尚文東右第（10） |
| おもほす | 京日栄と尚文東右第（9） | きこえさす | 京中日栄と尚文東右第（10） |
| 御覽ぜさす | ナシ | 申さす | ナシ |

次に、説明のあるものを紹介しておく。

(栄) 最高敬語には右の「す・さす・しむ＋給ふ」のほか、次のような語がある。これらは、二つの尊敬語が重なって、一語化したものである。 おはします (おはす＋ます) 聞こしめす (聞こす＋めす) ……

(京) 尊敬動詞＋尊敬動詞 普通は一語として扱うが、元来は尊敬語を重ね用いたものである。したがって、高い敬意を表す。

例 おはす＋ます↓おはします おぼす＋召す↓おぼしめす 聞こす＋召す↓聞こしめす

(右) 敬意の程度の違い 尊敬語や謙讓語では、同じような意味を持ちながら、それぞれの表す敬意の程度に違いが見られるものがある。次の各組の語においては、それぞれ、左側にある語のほうが、尊敬語については尊敬の度合いが強く、謙讓語については謙讓の度合いが強い。

尊敬語	[おぼしめす>おはす>思ひたまふ]
	[ご覧す>見たまふ]
	[おはします>おはす]
	[贈はす>賜ふ]
	[のたまはす>のたまふ]
謙讓語	[聞こえさす>聞こめ]
	[参らす>参る]

文法テキストも辞典とほぼ同じ傾向を示しており、「御覽ぜさす」「申さす」を一語と認めない、「奉らす」は中村幸弘氏(福武古語辞典の編者)のみが認めるといった様相である。しかし、続いて引用した三本の説明には一語とし

て扱う考え方が窺われるので、この考え方をさらに徹底させれば「御覽ぜさす」「申さす」「奉らす」も一語として認定できるはずなのである。

「奉らす」「申さす」については既に述べたので、最後に「御覽ぜさす」について若干述べる。

六、「御覽ぜさす」について

「御覽ぜさす」については、『新明解古語辞典補注版第二版』（三省堂）で、金田一春彦先生が、「ごらんぜーさす」「御覽ぜー」（連語）御覽に入れる。お目にかける。『かの贈物ーす』（源・桐壺）の項目についての補注で、「吉沢義則『源氏物語新釈』・古典大系『源氏物語』（山岸徳平）ともに、『さす』を使役の助動詞として、このように解する。いつもこのような場合、「さす」は使役という。「さす」は尊敬の意味で、省かれた主語は帝とは解されないだろうかと気にかかる。」と述べておられる。このお考えを稿者の立場で言い替えると、「御覽ず」という尊敬体の動詞の未然形に、敬意を強める接尾語（＝もと尊敬の助動詞）「さす」がついて出来た、より強い尊敬の意を表す一語の動詞であるとなる。例文でみてみよう。

○（道頼）「……いとくとく御覽ぜさせずやおぼえはべりしも、……」（『落窪物語』〈巻三〉）^{（註10）}

これは、男君道頼が女君の父中納言に対面して、今までのいきさつを釈明している場面である。稻賀敬二氏は頭注で「（もし再会したとしても）女君に愛情こめてお会い下さることもないかと思ひますにつけて。『とくとく（篤と）』は平安朝の作品に例を見ない。」と述べておられる。稿者はこの「御覽ぜさすや」の主語を中納言とし、愛情こめて女君を御覽にならないのではないか、の意と解する稻賀説に従いたい。「お目にかけない」の意とは解しがたいので

ある。なお、このあたり諸本に異同があり、確たる証例とはしにくいのが弱点である。この語については未だ考察の途上にあり後考を期したい。

七、むすび

橋本文法を基盤とする現行の学校文法では、敬語法を尊敬（為手尊敬）・謙讓（受け手尊敬）・丁寧（聞き手尊敬）の三つに分類するのが普通である。その中で尊敬の助動詞と呼ばれる下二段活用（「す」「さす」）は、使役にも用いられる。（歴史的には使役の方が元といわれるがここではおく）（上代の尊敬の助動詞「す」（四段活用型）も語源は同じだと思いがこれもしばらくおく）この「す」「さす」が、尊敬動詞「たまふ」「のたまふ」に付く時には、上接語の尊敬の意を強める働きをし、「たまはす」「のたまはす」はそれぞれ「たまふ」「のたまふ」よりも尊敬の度合いが強いと言うのが通説になっている。

ところが、謙讓語「奉る」「参る」「聞こゆ」「申す」に「す」「さす」が付いた時は、注釈書・辞典・文法書ともに一致した説明がなされていないのが現状である。

本稿では、「奉らす」「参らす」「聞こえさす」「申さす」を語構成および意味用法の上から同列に一語として扱うことを提唱した。そして、それぞれ「奉る」「参る」「聞ゆ」「申す」よりも強い謙讓の意を表すことを、用例の上から証明した。この場合の「す」「さす」の働きを「敬意を強める接尾語」と規定することによって、最も合理的に説明できることを述べた。すなわち、尊敬語に付いた時には上接語の尊敬の意を、謙讓語に付いた時には上接語の謙讓の意を強める働きをするわけである。これによって、どうしても使役では説明できない場面における用例もスッキリと

説明できるのである。高等学校における古典文法の指導法改善に有効であると考え、次第である。

また、「おもほす」「おぼしめす」などを一語とする考え方を推し進めて「御覽ぜさす」という語を（一語の尊敬動詞として）認定できないかと考えていることを付記した。

（平成三・一〇・七稿）

注

- （1）『枕草子』の章段数、本文引用は「日本古典文学大系」（岩波書店）による。以下同じ。
- （2）『落窪物語』の本文引用は「日本古典文学大系」（岩波書店）による。以下特にことわらない限り同じ。
- （3）「進奏は藏人所を通すので、使役の助動詞が用いられる」（三谷栄一『日本古典文学全集 落窪物語』）。「奉る」ように指図せよ。『せ』は使役（柿本奨『落窪物語注釈』笠間書院）などであるが、藏人は単なる取次ぎであり内容に触れることはできないし、手続き上中介するだけで、あくまで奉上文は大将道頼が帝に差し上げる（『奉らす』）のである。実際は大工さんが造るのに、「こんど家を造りましてね」と言うのと同じで、取次の藏人を普段意識してわざわざ使役表現をすることは、特別の場合を除いてなかったものと思われる。
- （4）「強い敬意」とは、「奉る」よりも敬意の度合いが強い意。「奉る」と「奉らす」などの用法の違いについては、第四章で述べる。
- （5）宮地裕「助動詞とは何か」（『品詞別日本文法口座7 助動詞I』明治書院、昭和47）
- （6）進藤義治「栄花物語の『せ給ふ』（『南山国文』第七号、昭和58）
- （7）進藤義治「栄花物語の『聞えさせ給ふ』について」（『南山国文』第六号、昭和57）
- （8）『大鏡』の本文は、松村博司校注『日本古典文学大系』（岩波書店）によった。
- （9）高校生用の文法テキストは、初学者が初めて体系的に文法を学ぶ拠り所であるから、その叙述には細かな配慮が必要である。そんな考えから比較を試みた。文法テキストは、各社の見本を愛知県立瀬戸西高等学校国語科から借用した。特に松村晃男教諭の御高配に依ることを記して謝意を表す。
- （10）新潮日本古典集成（二〇七頁）による。